

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立志賀高等学校

| 重点目標 | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析（成果と課題）及び次年度の扱い |
|--|--|--|-------------|--|
| 1 学力の向上 学習支援アプリや生成AIの活用等、一人一台端末を効果的に用いて学習意欲の高揚と基礎学力の定着を図る。 | ① ・生成AI等を活用し一人一台端末を用いた学習活動を考察する。その学習活動を授業実践に取り入れて、生徒の学習意欲を向上させる。 | 「授業中の一人一台端末を用いた学習活動で学習意欲が高まった。」と答える生徒の割合が A：80%以上である。 B：70%以上～80%未満である。 C：60%以上～70%未満である。 D：60%未満である。 | A (96%) | 後期は、全校生徒で96%に達し、前期を上回る結果となった。10月開催の「第3回情報研修会（校内GIGA研修会）」では、生成AIの活用法や個別最適な学びを重点的に扱った。これを受け、教員による教材研究での生成AIの活用が進み、一人一台端末を効果的に取り入れた授業実践が展開されたと思われる。その結果、生徒の学習意欲の向上につながった。 |
| | ② ・授業で学習した内容を定着させるために学習内容に関連した問題を学習支援アプリで解かせて、アウトプットの回数を増やす。 | 「学習支援アプリを用いた授業で基礎学力がついた。」と答える割合が A：60%以上である。 B：50%以上～60%未満である。 C：40%以上～50%未満である。 D：40%未満である。 | A (93%) | 後期は、全校生徒で93%に達し、前期を上回る結果となった。この推移から、学習支援アプリの継続的な活用が基礎学力の定着に有効であると思われる。今後も学習支援アプリの継続的な活用が望まれる。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | 集計結果では前期より成果が上がっているが、どのような過程により成果が上がったのか示してほしい。 | | |
| 学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策 | | 学習支援アプリについてどのようなアプリなのか、どのような効果があるのか示す必要がある。 | | |
| 2 進路の実現 キャリア教育を推進し、進路意識の高揚を図り個に応じた指導を充実させることで、進路目標の達成を目指す。 | ① ・社会人講座や学習支援アプリの活用により、進路意識の高揚を図る。 | 「社会人講座、各種マナー講座や企業見学会等、また学習支援アプリの活用により、進路実現に向けての意欲が高まった。」と答える生徒の割合が A：90%以上である。 B：80%以上～90%未満である。 C：70%以上～80%未満である。 D：70%未満である。 | A (95%) | 長年の積み重ねにより社会人講座、各種マナー講座や企業見学会等が生徒にも定着し、積極的に意義を吸収しようとしている。ロータリークラブ等の皆様も意義深くなるよう熱心に取り組んでくださったことが意欲の高まりにつながった。 |
| | ② ・面談等を通して進路目標を把握し、個に応じた進路指導を行うことで進路目標の達成に必要な力を養成する。 | 3年次生の9月時点での進路目標（第1志望）をかなえた率が A：90%以上である。 B：80%以上～90%未満である。 C：70%以上～80%未満である。 D：70%未満である。 | B (83%) | 30人の生徒が自分の第1目標を達成した。但し、志望を固めること、志望の適正化、取り組みの時期に課題が残った。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | 特に1、2年次生において企業見学の際などに進路意識の低い生徒が見受けられる。企業調べなどを通して進路意識の高揚をはかって欲しい。 | | |
| 学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策 | | 従前から3月に1、2年次生全員を対象に企業見学を行ってきたが、今年度より加えて進学相談会、企業研究会を実施する。 | | |
| 3 防災対応力の強化 能登半島地震で被災した経験をもとに危機管理意識を高め、緊急時でも適切に対応できる体制を整備する。 | ・学期に1回以上の防災教育活動を実施し、教職員の責任感と使命感を醸成する。 | 「避難訓練等の防災活動で教職員の責任感と使命感が高まった」という教員の割合が A：90%以上である。 B：80%以上～90%未満である。 C：70%以上～80%未満である。 D：70%未満である。 | A (100%) | 目標達成のためには「意識・感情」だけでなく、「知識・行動・仕組み」を客観的に評価し、能登半島地震の教訓を具体的に反映した訓練と体制整備を行うことが不可欠である。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | 生徒引き渡しの際、保護者車両の待機スペースの選定および、混雑を回避するための車両通行ルートの設定が必要である。 | | |
| 学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策 | | 視覚的な誘導インフラの整備：文字を読まなくても直感的にルートがわかる「色別ライン」や「大型矢印看板」を事前に準備し、迅速に設置できるようにする。 | | |

| | | | | | | |
|----------------------------|--|--|---|---|--|--|
| 4 | 基本的生活習慣の確立 心の教育を実践するとともに挨拶の励行を中心とした基本的生活習慣の確立や規範意識の高揚を図る。 | ① | ・いじめアンケートを年3回以上実施するとともに、生徒全員に面談の回数を増やす。 | 「学校はいじめに対するの取組をしっかりと行っている。」と答える生徒の割合が A：95%以上である。 B：80%以上～95%未満である。 C：70%以上～80%未満である。 D：70%未満である。 | B (93%) | 個人面談の継続やいじめに対する学校の毅然とした取り組みの結果、中間評価を上回った。引き続き徹底して取り組んでいく。 |
| | | ② | ・保護者等と連携を図り、生徒自らも家庭でのスマートフォン等の使用ルールづくりに取り組む。 | 「家庭において、スマートフォン等の使用のルールが守られている。」と答える保護者等の割合が A：70%以上である。 B：60%以上～70%未満である C：50%以上～60%未満である。 D：50%未満である。 | C (53%) | アンケートの結果を保護者に周知し、共通理解を持って指導したが53%とC評価であった。今後も家庭内ルールの遵守継続に向けて保護者・生徒会と連携していく。 |
| | | ③ | ・毎日登校指導をするとともに、全教員、生徒会、PTAと連携した挨拶運動週間を設定する。 ・授業規律としての挨拶指導をする。 | 「生徒は語先後礼の挨拶がしっかりとできている。」と答える教職員の割合が A：95%以上である。 B：80%以上～95%未満である。 C：70%以上～80%未満である。 D：70%未満である。 | B (90%) | アンケートの結果90%とB評価であった。今後も教職員が率先垂範しつつ、生徒会と連携した挨拶運動週間を設ける等、取り組みを強化する。 |
| | | ④ | ・環境美化週間や放送などにより、学校環境衛生活動を積極的に推進する。 | 「身のまわりの整理整頓を心がけ、校舎内の清掃活動の際に自ら進んで環境美化に取り組むことができた。」と答える生徒の割合が A：90%以上である。 B：80%以上～90%未満である。 C：70%以上～80%未満である。 D：70%未満である。 | A (96%) | 掃除監督や保健委員会を通じて、環境美化週間を中心に志賀高5S活動の推進を図っており、意識して取り組む生徒が少しずつ増えている。今後は5S活動の習慣化を目指し、保健委員による啓発内容も工夫していきたい。 |
| 学校関係者評価委員会の評価 | | | 生徒は学校内だけではなく地域においても挨拶をしっかりとしている。日頃の様子を見ても大変落ち着いている。 | | | |
| 学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策 | | | 今後も全職員で連携し、生徒の指導に取り組んでいく。 | | | |
| 5 | 教職員多忙改善 時間管理を意識し、業務体制と協力体制の構築と併せ校務DXを推進することで、業務の効率化を図る。 | ・教職員の働き方を更に見直し、担当業務に対して校務のDX化を目指し、時間外勤務の縮減を図る。 | 担当業務が校務のDX化により勤務時間が縮減したと答える教職員の割合が A：75%以上である。 B：50%以上75%未満である。 C：25%以上50%未満である。 D：25%未満である。 | B (71%) | 71%の教職員は一定の改善を実感しているものの、目標に達していないのは、特定の多忙な職員への個人対応や、全職員へのDXの浸透が不十分であったことが原因と考えられる。すでにDXを実践している教職員の成功事例（例：デジタル採点、WEBフォームでの欠席連絡受付、文字起こしアプリの情報共有）を全職員で共有する研修を定期的実施し、浸透を加速させる。 | |
| | | | | | | 学校関係者評価委員会の評価 |
| 学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策 | | | 教職員の情報研修を強化と業務効率化を推進し、働き方改革と働きがい改革を両立させ、学校全体で業務改善に取り組む。また生徒一人ひとりの個性に寄り添い、人間性を育むという教育方針を学校の強みとして今後も堅持していく。 | | | |